

団塊のカタログ

トシタロー・クラフィティ

今号は**昭和31年**の漫画特集である。

フクちゃん

日本漫画界の重鎮・横山隆一さんの代表作**フクちゃん**が毎日新聞に登場した。

昭和46年に連載を終了するまで5,534回も連載されたが、初登場はさらに古く、ベルリン・オリンピックが開催された1936年（昭和11年）にまでさかのぼらなければならない。

その年の1月、横山さんは朝日新聞の4コマ漫画の連載に大抜擢された。

「江戸っ子健ちゃん」というのだが、フクちゃんはその中の登場人物の1人で、それも主人公の健ちゃんをイジめる役だったのだ。

年令は5・6才、カリアゲ頭になぜか大学帽のフクちゃん、いつしか健ちゃんをしのぐ人気者になり、20年たったこの年にめでたく主人公へと昇格したのである。

これに似た例は結構あって、**Dr. スランプ**の**アラレちゃん**もそうだ。

ベビーギャング

岡部冬彦さんの代表作といえば**アッちゃん**と**ベビーギャング**である。

若夫婦に1人息子のありふれた設定で、人畜無害の**アッちゃん**にコメントの必要はないが、この頃としてはキラリと光るしゃれたセンスの**ベビーギャング**は特筆ものである。

セリフがないパントマイム漫画で、白いベビー服に黒いアイマスク、右手におもちやのピストルを持っている可愛い男の赤ちゃんが主人公の4コマ漫画だ。

1コマ目、この赤ちゃんがテレビでラブ・シーンを見ている。次のコマではパパとママがキッチンでケンカしていて、それをこのコが覗いている。ここまでが**起**と**承**で、3コマ目の**転**では**ベビーギャング**が両親にピストルを突き付け、2人が手を上げているシーンになる。最後の**結**のコマで、2人は抱き合っ
てキスをして仲直りしてチャンチャン。

ベビーのキャラも可愛かったし、ストーリーも別にイヤらしくも何ともないのに、なぜか成人指定(?)で、大人向けの漫画雑誌に連載されていたものである。

たとえば漫画読本とか土曜漫画。雑誌名につられて本屋サンで立ち読みした小学生も多かったが、小説や対談ばかりで漫画もタメにならないモノばかりだった中で、唯一の例外が**ベビーギャング**であった。

むろん買うわけにはいかないから、近所の本屋さんか床屋さんでそのページだけ拾い読みするだけなのだが、これがまた少しだけ大人の世界に足を踏み入れたような気がして、なんとなくうれしかった覚えがある。

背番号0

巨人の星のような根性もの以前の野球漫画なら**寺田ヒロオ**さん。中でも**背番号0**だ。

かつて、その名も「野球少年」という、少年向けの月刊野球雑誌があった。

昭和22年創刊で35年廃刊というから、まさに団塊の世代と共に生きた雑誌といえるが、**少年クラブ**（講談社）**おもしろフック**（後に**少年フック**。集英社）**冒険王**（秋田書店）や

少年（光文社）の大手に比べると、^{メジャー}少年画報（少年画報社）と並んで弱小の印象が強く、^{マイナー}大した印象は残っていない。

最盛期の昭和25年新年号は、当時の少年雑誌としては新記録の25万部を記録したが、その頃ワシらは3つか4つ、小学校に上がって漫画に興味を持ちだした頃にはすでにマイナーにおちいていた。

そんな中で歴史に残る漫画が**背番号0**。

本当の名前は**是郎**（せろう）だったと思うが、町内の少年野球チームの人気者である。

ゼロ君は野球漫画の主人公らしくなく、エースでも4番でもキャプテンでもない。

バントをしてでも死球をくらってでも塁に出て、相手のスキについて盗塁するといったセコい役割の1番打者なのだ。

チーム・メイトを紹介しておこう。

3番打者はエースの藤本くん。長身で面長沈着冷静な秀才タイプ、眼鏡をかけている。

4番バッターはゴンちゃん。藤本くんとは逆に太め、外見にふさわしいホームラン打者である。（今でいえばマルチネス）

5番は大山くん。ポジションは捕手。

守備の要にふさわしくガッチリした体格だが、ゴンちゃんとちがってデブというほどではない。この少年がキャプテン。

多くの場合、野球漫画の主人公はこの中の1人であるはずだが、**ゼロ**君は控え目なトップ・バッター。ファーストだったと思うが、時には藤本くんのかわりにピッチャーをやったこともあるような気がする。

それだけ目立たない存在だったのだ。

家族構成もありふれていて、お父さんはもちろん会社員、お母さんはきれいでやさしく可愛い妹が一人いるという、絵にかいたような模範家庭である。（お宅はどうですか？）

トップ・バッターの**ゼロ**君を始め、藤本君やゴンちゃんや大山君もチーム・プレイに徹

していて、超人・英雄は登場しない。

こんな設定もいいが、やはり地味すぎた。

やがて寺田さんは超人野球漫画の先駆けともいえる**スポーツマン猿飛佐助**を発表する。

こちらは雲に乗って空を飛べるし、ホームランも連発でブチこむ。悪人もちゃんといってこれが黒いスーツの石川五右衛門である。

この両作品を足して2で割ったような野球漫画がやがて登場する。

少年サンデー（昭和34年創刊）に連載された**スポーツマン金太郎**がそれで、こちらが寺田ヒロオさんの代表作となっていて、ワシは**背番号0**の方がお気に入りである。

やがて野球漫画に魔球だ秘球だ〇〇打法だなどと登場するようになり、寺田さんのほのぼの野球漫画は過去のものとなる。

ワシらにしても**黒い秘密兵器**とか**巨人の星**に新しい魅力を感じたのも事実だが、それでも**ちばあきおのフレイボール**とか**キャプテン**など、ゼロ君もの野球漫画を思い起こさせてくれる作品も絶えることはなかった。

スポーツ根性ものはすっかり消えてなくなり、魔球や大リーグ・ボールも過去のものとなってしまったが、野球漫画の原点**背番号0**は永久にジャイアンツ同様、不滅である。

鉄人28号

鉄腕アトムとならんで月刊誌**少年**の超人気漫画だったのが、横山光輝さんの不朽の名作ご存じ**鉄人28号**である。

アトムが月刊誌**少年**に登場したのは昭和27年4月でワシが4才の頃、まだ漫画に親しむ前だから誕生のエピソードは知らない。

読み始めた頃にはすでに人気漫画だったわけだが、この**鉄人28号**は連載の当初からズーッと見ることができたから、ナマの記憶はこちらの方が鮮烈である。

太平洋戦争も終わろうとする頃、日本軍は口

ボットを兵器として利用しようではないかと研究・開発を進めた。その28番目に完成したから**28号**というわけだが、こんなところにも戦後10年の時代背景が感じられる。

アトムに出てくる御茶ノ水博士しきしまはかせのような役割として敷島博士が登場する。

メガネをかけていて、いかにも学者っぽい雰囲気なのだが、この人がロボット研究の第一人者という設定である。

そこに日本軍の残党らしき悪者の一味がなぜか突然現れ、博士にロボットを兵器として完成するように脅迫するのだ。

だからといって、いきなり**28号**が誕生するわけではない。

ロボットは27号までが完成していて、これを改良した**大型27号**が登場し、結構大暴れをしてワシラ読者を納得させてくれるが、アツという間に消えてなくなる。

この**大型27号**がスマートでカッコ良く、これがタイトルの**鉄人28号**かと期待した良いコは多いはずである。

さんざんジラした後でやっと**28号**が登場するのだが、始めの内はやたら街を破壊する悪役であった。世界征服を企む悪人が操るのだからやむを得ないが、やがてリモコンが**金田正太郎**少年の手にわたり、一転して正義のヒーローになる。

国鉄スワローズ（今のヤクルト）のエースだった金田正一さんにちなんだネーミングであろう金田正太郎くん、小学校高学年の設定らしいのだがチェックのブレザーに黒い半ズボン、Yシャツにネクタイのいでたちでおよそ小学生らしくない。

それはいいのだが、最終回までこの服装が変らないのだ。多くの傑作を残している作者であるが、どうやらファッションには無頓着のようで、主人公はほとんど着替えない。

週刊**少年チャンピオン**に連載され、テレビ

化もされた**バビル2世**に至っては、学生服だけの手抜きである。

この**鉄人**のストーリーにしてもあまり変化に富んでいるとは思えない。

同じような悪い大型ロボットが姿・形を変えてしつこく登場するか、鉄人を操縦するリモコンが敵に奪われるかのどちらかの2パターンだから飽きてしまう。

そうはいつでも**鉄人**の人気は抜群だった。

当時の少年月刊誌には大体10品目前後の付録がゴソツとついてきたもので、厚紙が主原料の安っぽい組み立てものが第一付録、その他に別冊付録がなん冊かついてくるのだが、そのトップを飾るのが大体**鉄人**であった。

まず本誌で8ページ位あって「この後は別冊でお楽しみください」となっていて別冊へと続く。本誌は今の週刊誌と同じ大きさのB5判で別冊はその半分のB6判だが、**鉄人**は少ない時でも48ページ、多い時は64ページもあった。この本誌と別冊の2本立てが当時の月刊誌の連載漫画のステータスで、その中でも**鉄人**は常に一番厚かったから、これだけでも人気の程がわかる。

電子頭脳で自らの意思で行動できる**アトム**は一代で終わってしまったが、人間コントロール型の**鉄人**スタイルはその後**マジンガーZ**や**ガンダム**などに引き継がれていく。

それにしても最近の悪役は根性がない。

世界征服を忘れていないのは「オースチン・パワーズ」のDr. イーブルだけだ。

嗚呼！ 貸本屋

昭和30年代究極の徒花文化といえは**貸本屋**である。この頃の月刊誌は一冊100円前後だったが、主だったところをザッとあげても5・6冊あったし、これを全部買える小学生などそうはいなかった。

それを本誌と別冊付録あわせて1泊2日10

円から20円ほどで貸してくれるのが**貸本屋**であつた。(組み立て付録は5円か10円で売ってくれたりして、こちらは早い者勝ち)

この大手の月刊誌に対して、マイナーにあたるものが2種類あつた。

ひとつはハード・カバーの単行本で、やはり一冊5円か10円で借りられる。これがまた結構掘り出しモノが多くて、手塚治虫の初期の名作**ロック冒険記・ロストワールド・ジャングル大帝**などは単行本を貸本屋で借りて読ませていただいたものである。

今の〇〇コミックに当たるのがこの単行本であるが、他にはギャグ漫画の傑作**ロボット三等兵**(前谷惟光)とか、輸入物ではデイズニーやスーパーマンなどもよく借りた。

そんな貸本屋も実態は古本屋の兼業で、毎月発行される月刊誌はともかく、売れない古本を貸本にしていたのであるが、新顔として**貸本専門誌**がこの年から登場した。

その第1号が大阪の日の丸文庫の**影**で、その名の通り貸本屋専用であつた。

影には**探偵フック**のサブ・タイトルがついていたが、看板に偽りなく、ナゾ解き・ミステリー・ハードボイルドが主流である。

その後、同じような探偵ものの**街**をはじめ、時代ものの**魔像・怪談**などが続々と登場、いずれもフツの月刊少年誌ではお目にかかれないような題材と画風が持ち味で、部数は少なくとも質では負けない、そんな反権力的な姿勢が伝わってきて、ワシも気合いを入れて読んだものである。

影や**街**を例にとれば、探偵ものといっても**まぼろし探偵**とか**月光仮面**とは違って、人はアッサリ殺されるわ血はドバドバ流れるわでおよそ良いコ向けとは思えない。

忍者ものだと、ガマや大蛇に変身しないかわりに移し身の術が登場し、後でそれなりの術の合理的解説もしてくれる。

真空斬りは出てこないが、切腹シーンもあれば首も空を飛ぶ。こんな具合だからPTAのオバさん連中に好かれるわけではなく、悪書だということで追放運動のターゲットにされたのも、当然といえば当然であつた。

従来の少年向け月刊誌は大手の出版社が発行し、全国の本屋の店頭にドツと並べられるが、一方の貸本誌は貸本屋サンにおろしたらそれっきりで発行部数もせいぜい1000部、常連の利用者以外の目には止まらない。

それだけでも読者層が限定されてしまうところにもってきて、大体が貸本屋サンはそんなに広いものではないから、面白くなければサッサと片付けられてしまう。

そうなれば、つぎの号から仕入れてもらえなくなるに決まっているから、それはもう必死にもなろうというものである。

作者も大手に相手にされないような若手ばかりなら、出版元もそれに合わせて二流・三流・四流・五流、読者も買ってまで読む余裕のないピンボー人とくれば、そうそう口なことはないはずだが、こんなところにこそ文化は生まれてくる。

その象徴が**劇画**(ゲキガ)である。

従来の漫画に反抗・反発すべく、絵はよりリアルに、ストーリーはよりドラマチックに売り文句に良いコ向けの月刊誌には絶対に出てこないカゲキな表現ばかりで、それ故フツの人の目につかない貸本屋でしか手に入らなかったのである。

貸本屋の常連には、集団就職で東京にやって来て下町の工場で働いている低賃金の若年労働者が多かったもので、劇画のターゲットもこれらの皆様方であつたようである。

この頃のワシは小学生、読者としては若い方だったろう。実際、同級生で劇画の存在を知っているヤツはあまりいなかったし、それがまた優越感でもあつた。(この項続く)